

富山県の高齢者の生活と共生 (I)

Living Style of Elderly People in Toyama and Their Way of Collaborating with the Community (I)

金 田 桜 子 佐々木 昭 彦
KANEDA Yoko and SASAKI Akihiko

I はじめに

共生は広く使われた言葉である（黒川紀章, 共生の時代, 1989）。共生を改めて定義するならば, 人々が競争し, 協調しながら相互の関係を維持し, 地域の中で活動して共存を図ることである。集団が共有する冠婚葬祭活動も, 個人ごとに異なる趣味等の活動も地域環境の変化によってその基盤が変わる。共生の実態は, このような生活と人間関係のノウハウや, 生活環境それ自体のでき上がり方や, 習慣・行事等に現れ, 地域ごとの独自性として記憶される。また, コミュニティの働きや, 住民相互の認識が保たれるならば, 共生は存続することができ, かつては生活環境の整備が経済企画庁の「豊かさ指標」の有力な要素であった。しかし高齢社会においては, 住民のネットワーク化された意識と行動とが, コミュニティ内外と直結することも重要である。そのためのソフトな技術と情報を共通の, 共有しうるノウハウとして伝承, 伝達,

拡大するしくみが必要である。

高齢者が新たな変化に適応する時には, 従来あった共生の枠組みも変化して, 高齢者と周囲の人々の関係が再調整されるはずである。その例として, 外出や地域活動における共生の物理的, 行動的側面は, 人々が地域社会にどの程度適応しているかを示す基盤であり, 心理的, 精神的状態に反映すると思われる。

整備された生活環境, 高い持ち家率と共稼ぎ率が, 富山県の高齢者の自立志向を生んでいる。また慣行によって裏づけられた地域共生は, 個人の行動や生活の特徴づけている。たとえば朝市などの試みで高齢者の自立性と活発さが観察できる。そのしくみをアンケート調査等により分析し, 明らかにするために生活行動や意識についてたずねた。また日常生活における行動や, 地域行事への高齢者の参加について分析し, 高齢者の生活を知る（共生とのかかわりを知る）ため日常の行動を画像として記録した。

かねだ ようこ（生活科学科） ささき あきひこ（国立公衆衛生院）

Ⅱ 対象と方法

人口約17万人の高岡市は、富山県西部に位置し、庄川と小矢部川に沿った洪積世の台地と平野部からなり、富山湾に面する海岸線と二上山地・西山丘陵地によって囲まれている。さらに万葉時代から江戸期を通じての文化や、明治以来の産業活動などの背景に恵まれている（図1）。

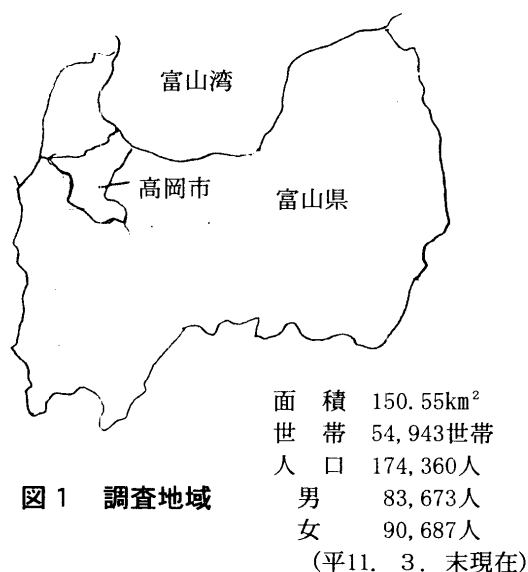


図1 調査地域

1. アンケート調査

高岡市中心部の福祉センター（1999年2月24日）において徒歩、自転車、自動車または無料巡回バス（曜日ごとに巡回方面が異なり、週1回の割合でまわってくる。）によって同センターを定期的訪問し、風呂を利用していた201名の高齢者から協力を得て面接調査を行った。表1は調査対象者の地区別人数である。2日間で男性84人、女性117人（平均と標準偏差では男71.9±7.5歳、女74.3±8歳）に女子大生のペア5組が約20分間かけて、身体状況、来所方法、集団活動、外出、散歩などについて調査用紙を用いて面接聞き取りした（表2）。

センターの来所方法はどのようにくるのかを巡回バス、家人が送る、歩いて、自分で運転、

表1 対象者の地区別人数

| 地 区 | 人数 | 地 区 | 人数 |
|--------|----|--------|------|
| 1 平 来 | 15 | 15 佐 野 | 0 |
| 2 定 塚 | 5 | 16 福 田 | 2 |
| 3 下 関 | 9 | 17 小 勢 | 0 |
| 4 博 労 | 15 | 18 立 野 | 3 |
| 5 木 津 | 32 | 19 東五位 | 5 |
| 6 横 田 | 8 | 20 石 堤 | 2 |
| 7 西 条 | 8 | 21 国 吉 | 2 |
| 8 川 原 | 2 | 22 守 山 | 2 |
| 9 成 美 | 6 | 23 伏 木 | 5 |
| 10 二 上 | 2 | 24 太 田 | 2 |
| 11 能 町 | 3 | 25 戸 出 | 0 |
| 12 牧 野 | 2 | 26 中 田 | 0 |
| 13 野 村 | 3 | 27 その他 | 68 |
| 14 二 塚 | 0 | 合 計 | 201名 |

表2 対象者の属性

| 年 代 | 男性 | 女性 | 合計 |
|---------|----|-----|-----|
| 59歳～64歳 | 14 | 17 | 31 |
| 65歳～74歳 | 40 | 40 | 80 |
| 75歳～84歳 | 25 | 52 | 77 |
| 85歳以上 | 5 | 8 | 13 |
| 合 計 | 84 | 117 | 201 |

自転車、その他に分け、質問項目とした。あわせて週何回ぐらい利用しているかについても問うた。

もう一つは身体状況である。現在の身体障害について、視覚、聴覚、発声、手の動作、姿勢保持、歩行困難の身体障害について、高齢者の様子（身体障害に触れたくない場合もある）を伺いながら聞き取り調査した。

高齢者の活動を、近隣との交流活動と集団の活動に分けた。近隣との交流では、相互の食事会、子供の結婚式、葬儀の手伝いに分け、回答は現在と過去との増減を知る上で、以前より増えた、変わらない、減った、ないの四つに分け質問項目とした。集団としての活動としては趣味活動、学習活動、宗教活動の三つについて、はい、いいえ、前にしたことがあるに分けた。

いずれも、性別、年齢群別の分布を調べ、パーセント表示にした。

2. 個人行動画像の記録

1999年10月～12月と、2000年3月～4月において高齢者の自然な生活動作を近親者、または友人が同行し、その時の行動や環境について対話しながら撮影した。撮られることに抵抗し、カメラはファインダーのないカメラを用いた（ソニー サイバーショットDSC-F35）。双方の行動を制約せず、自然な動作や周囲との関係を記録することを意図した（撮りなおしと、削除が自由にできる）。撮影者は女子大生10人がそれぞれ、同居している祖父母の週末の生活（外出、作業活動、家事、昼食、自由時間）を観察した。同じく中高年女性2人が1組で、ボランティア活動などで知り合った女性の高齢者15人について、外出などの行動（地域行事への参加記録など）を日中約3時間ずつ観察し記録した。いずれも本人の同意が得られた画像を提供した。カメラに保存できる画像は最高53枚であるが、1人当りの記録は5～20枚程度が多かった。記録者のメモと調査者による問い合わせによって説明をつけるとともに、高齢者の動作、場所、周囲の人々など共生に関する情報を記述した。

Ⅲ 結果と考察

Ⅲ－1 来所方法・回数・障害

福祉センターへの来所方法は、巡回バス30人、送迎17人、徒歩69人、自動車運転42人、自転車27人その他16人（友人の自動車に同乗、無回答）であり、元気に自力で来る高齢者が多い。

来所回数については、週1回35人、週2～3回21人、5回以上132人、無回答13人である。この点は、センター周辺の居住者が3～4割あり、毎日来る人数が多いと考えられる。対象者

の身体障害者は、視覚13人、徒歩6人、その他35人であった。「その他」についてはプライバシーや精神的な面を考慮し、質問を強制しないように心がけた。

Ⅲ－2 個人活動と集団活動

高齢者の個人の活動（表3）では、趣味活動の割合が70％、学習活動25％、宗教活動15％と趣味活動が学習活動や宗教活動に比べて高い。性別（表4）では、男性が趣味活動75％、学習活動25％、宗教活動15％であり、趣味活動については、女性より男性の方が多少多い。それに対して宗教活動では男性より女性が若干多い。また学習活動については男女同様の結果であった。

年代別（表5）では、趣味活動は59歳～64歳87％、65歳～74歳73％、75歳～84歳76％、85歳以上88％である。65歳～74歳群で一度低くなり、それ以降の群でまた増加するV字型をとった。学習活動では、59歳～64歳35％、65歳～74歳31％、75歳～74歳19％、85歳以上8％と単調に減少していった。それに対して、宗教活動では、59歳～64歳3％、65歳～74歳13％、75歳～84歳14％、85歳以上18％と単調に増加し学習活動とは対照的な傾向を示した。

集団の活動（表6）について退職後、増えた、変わらない、減った、ないの4つに分けてどうだったのかを問うた。相互の食事会は、増えた19％、変わらない45％、減った2％、ない34％であった。現役で働いていた時と同様、食事会への参加は半数程度あり変わらない。子供の結婚式の参加状況は、増えた18％、変わらない43％、減った7％、ない32％である。子供の結婚式の参加は親として出席するという考え方は当然のことと思われるが、今後結婚式のスタイルが変化してくれることも考えられ、高齢者との

表3 個人活動（全体）

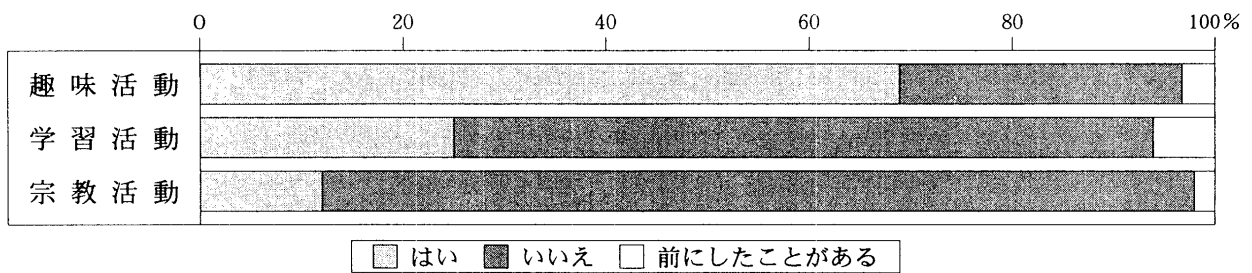


表4 個人活動（性別）

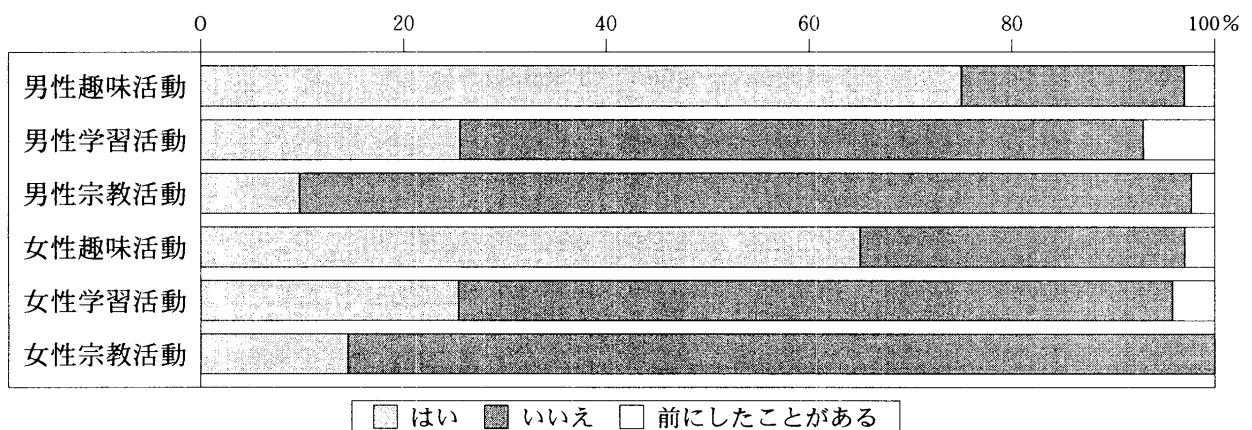


表5 個人活動（年代別）

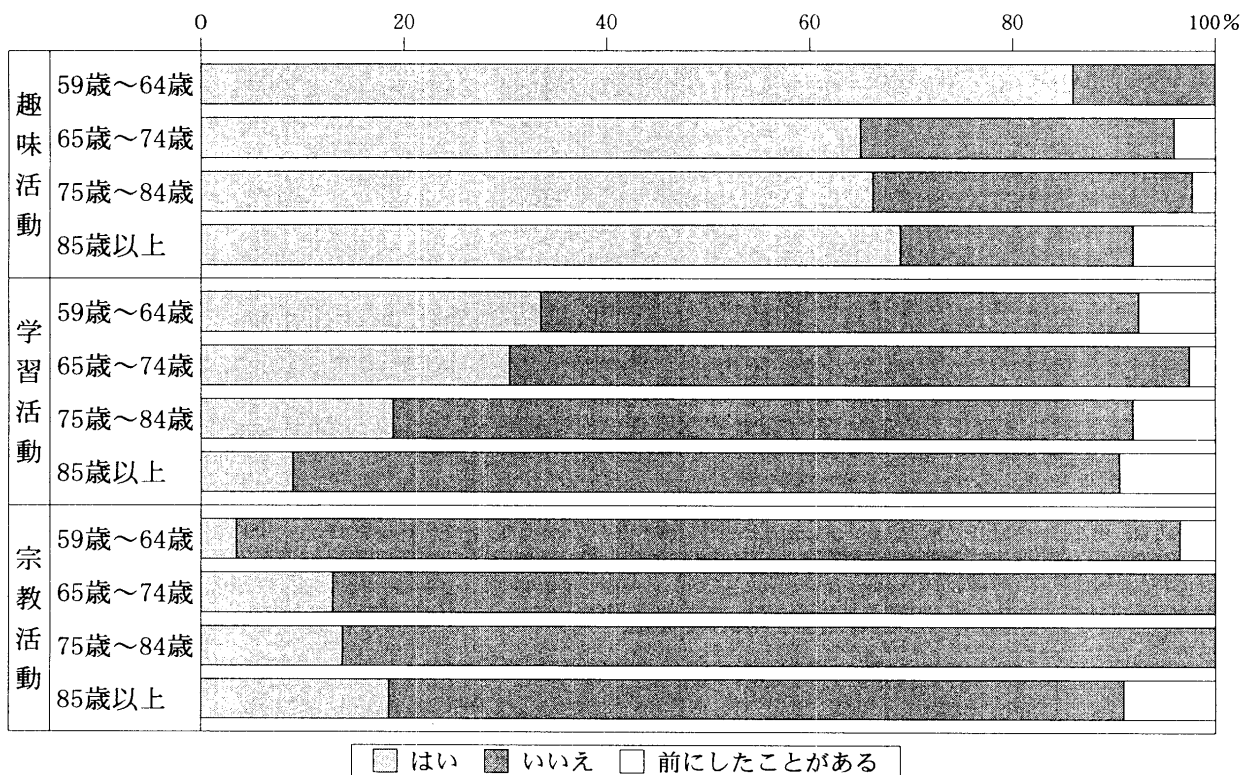


表 6 集団活動（全体）

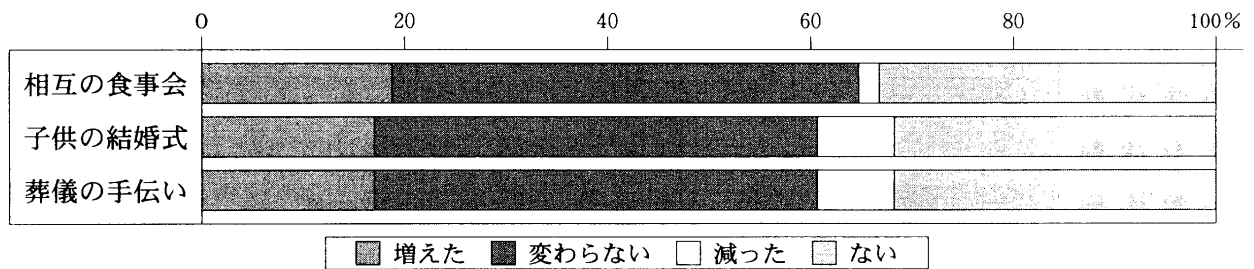
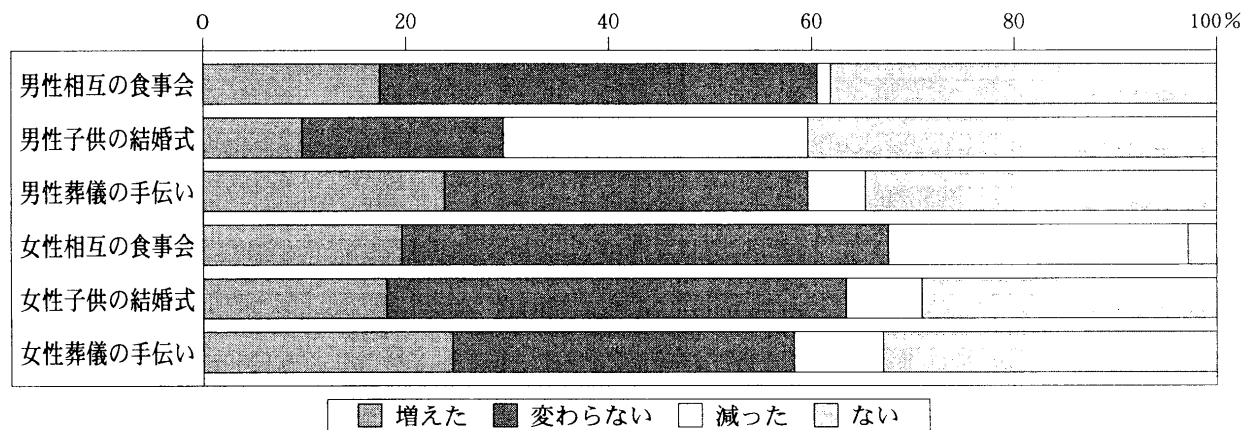


表 7 集団活動（性別）



共生の視点から注目していきたい。

葬儀の手伝いについては、増えた18%，変わらない43%，減った7%，ない32%であり，結婚式と同様セレモニーのあり方やお手伝いの関わり方が社会的状況に伴って変化していくと考えられる。それに対する高齢者の環境変化も当然といえる。

性別（表7）では，男女共葬儀のお手伝いが，子供の結婚式，相互の食事会に比べ高い値を示している。しかし男性の，子供の結婚式10%は相互の食事会や葬儀のお手伝いに比較して低い。また，子供の結婚式への参加が減ったは20%であり，項目別にも性差においても高い値を示している。

年代別（表8）では，参加の機会が増えたという増加群の割合は子供の結婚式，葬儀のお手伝いであり，特に子供の結婚式では65歳～74歳

が減少し，75歳～84歳，85歳以上の高年齢で回復している。葬儀のお手伝いについて，65歳～74歳で減少し，75歳～84歳で回復している。ただし，85歳以上で葬儀の手伝い，相互の食事会は皆無である。

Ⅲ－3 外出と散歩

外出の嗜好（表9）では，好き71%ときわめて高い。外出頻度（表10）については，毎日47%，週数回38%と8割以上が外出をしている。また，所要時間（表11）については1時間～2時間33%，2時間以上37%である。また，30～60分も10～20%とあり，時間や体力に合わせて外出していると考えられる。外出先の環境の快適さ（表12）については，快適が61%で，次いでその時々や場所によるが18%である。

外出の目的によってコースが変わり，場所や

表 8 集団活動（年代別）

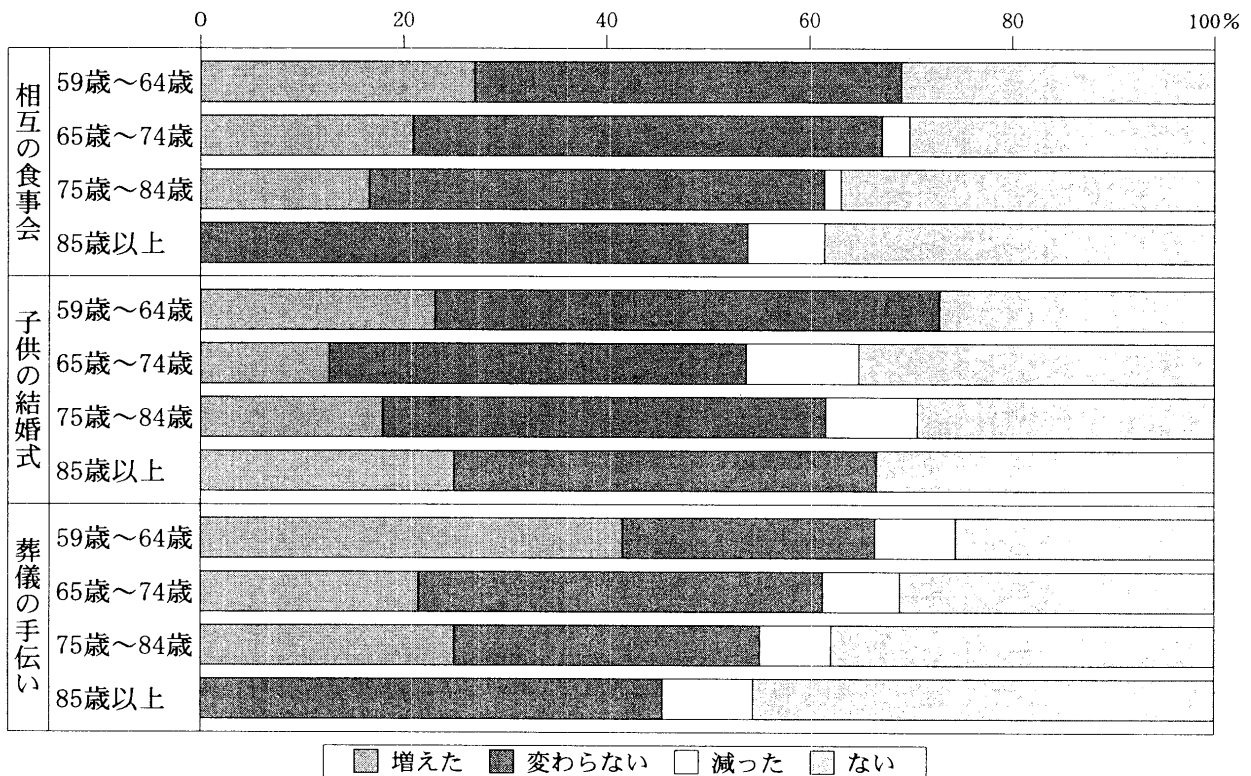


表 9 外出の嗜好

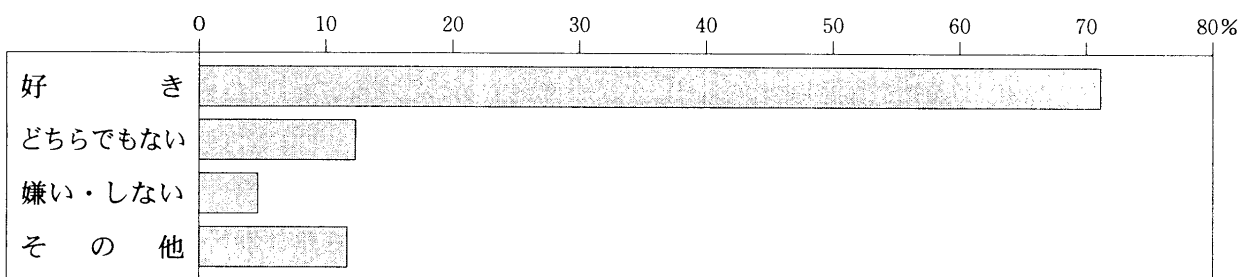


表10 外出頻度

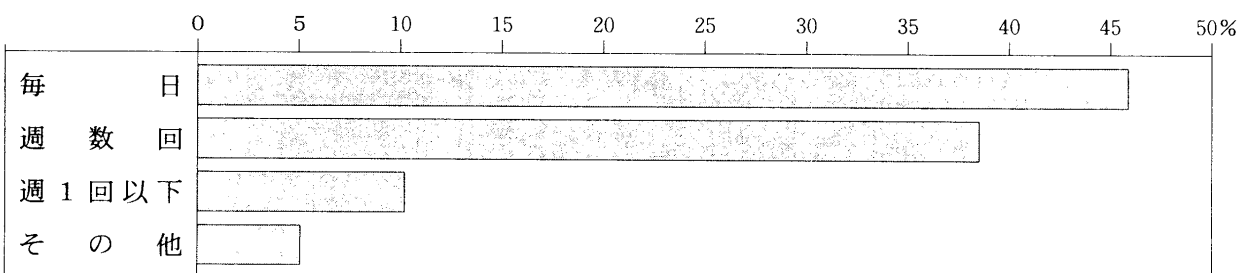


表11 外出所要時間

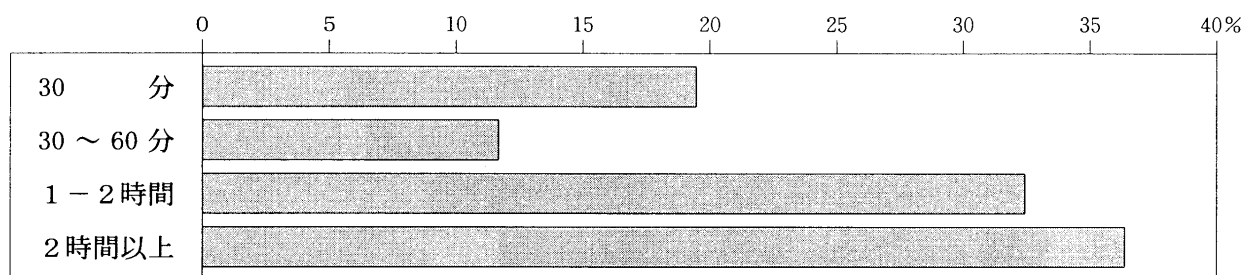
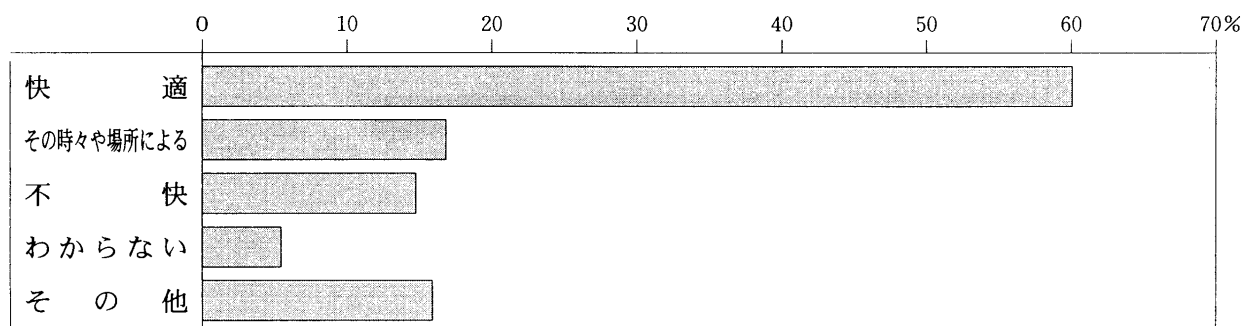


表12 外出先の快適さ



快適適度の割合も変化していると考えられる。また、満足度（表13）については、十分満足82%とかなり高かった。

散歩について、頻度、場所、所要時間、経路、満足、障害に分けてそれぞれ質問した。頻度（表14）は、毎日37%、週数回24%、週1回4%、であり全体の6割が散歩していることが分かった。

経路（表15）では、決まっている42%と高く、次いで、時々変わる17%、考えない5%、新しいところへ3%である。

散歩の所要時間（表16）は、5～30分31%、次いで、30～45分23%、45～60分15%、15分8%と高齢者にとっては30～40分が適度な散歩時間であることがわかった。また、経路（表17）については、車の少ない場所40%、次いで、平地27%、歩道のあるところ8%、坂のないところ3%と一番危険である自動車の多く通る所は

あえて避けていることがよくわかる。また、平地の多いところを選んだり、歩道があるところ等、安全に散歩ができるよう心がけていると思われる。散歩の満足度（表18）については、十分満足78%とかなり高い。散歩の障害（表19）では車の危険42%であり他の障害に比べてかなり高い。又散歩の経路の選択について、車の少ないところの回答がかなり高くこの点、一致する結果となった。高齢者自身の問題として、歩行が遅い18%、時間がない13%である。散歩は好きであるが身体のことでもかなり考慮していると思われる。散歩の環境として、歩道の不備11%もあり、特に市街地の散歩用の環境作りは大切だと考えられる。

Ⅲ－4 個人行動画像

行動画像については、対象者の特徴を（表20）にまとめた。モニター型のカメラは通常のカメ

表13 外出の満足度

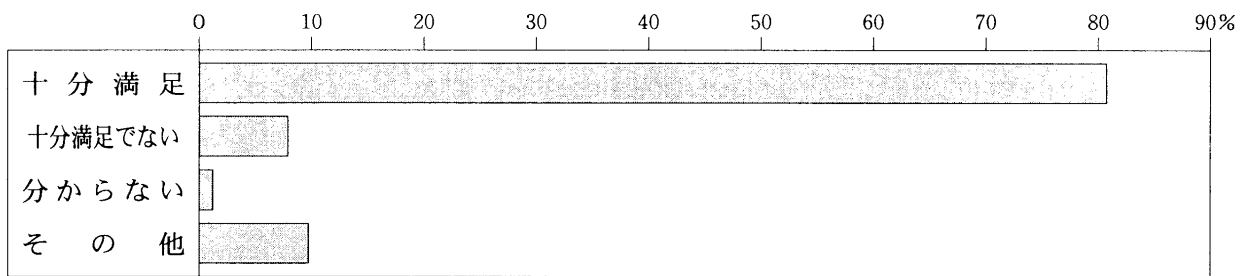


表14 散歩の頻度

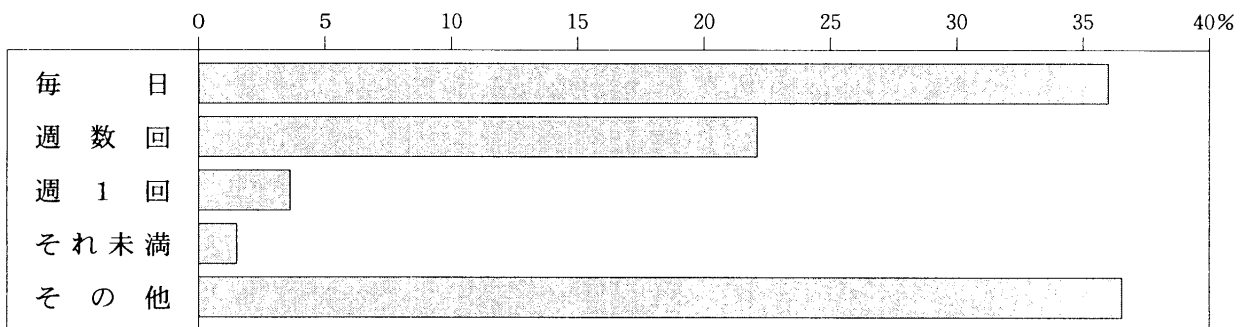


表15 散歩の場所

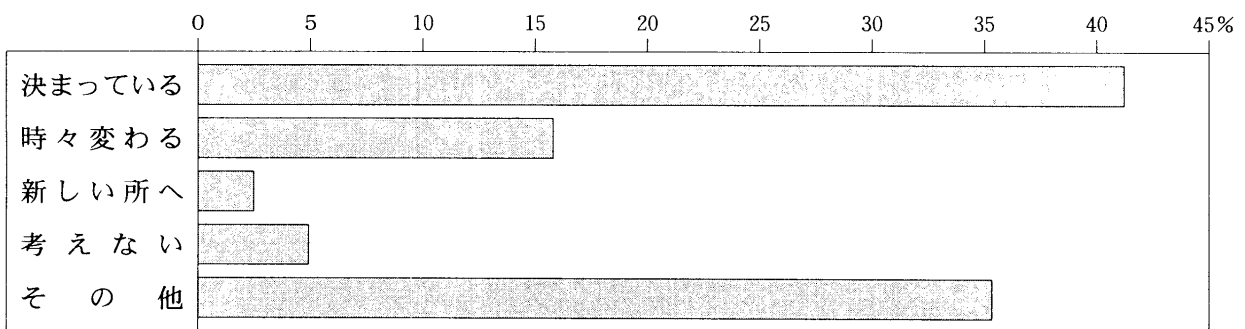


表16 散歩の所要時間

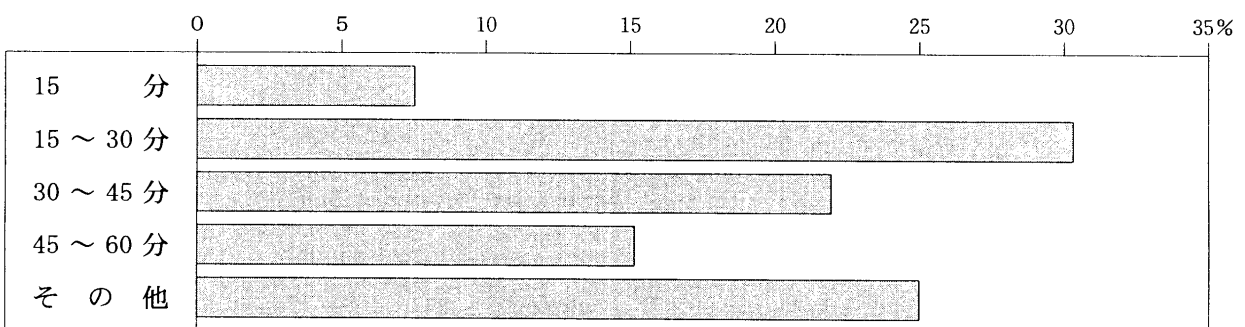


表17 散歩経路の選択

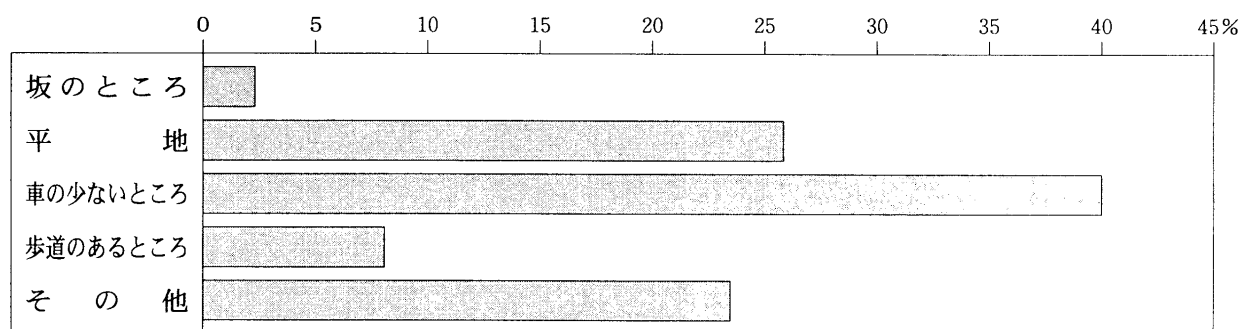


表18 散歩の満足

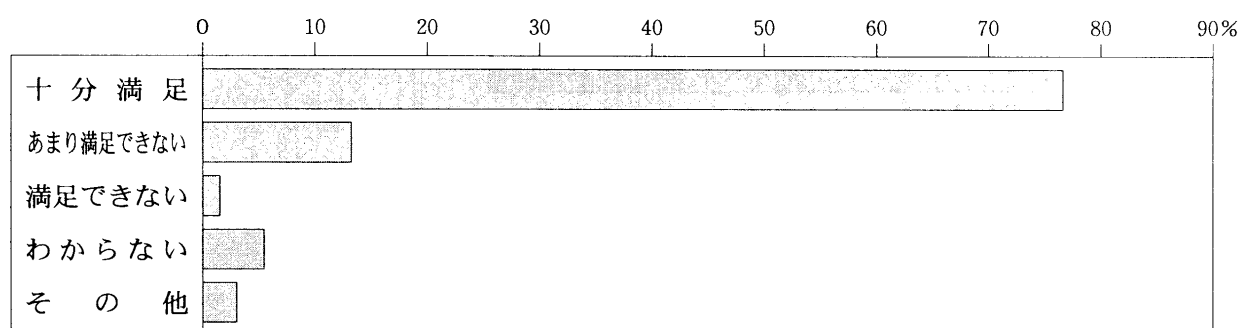
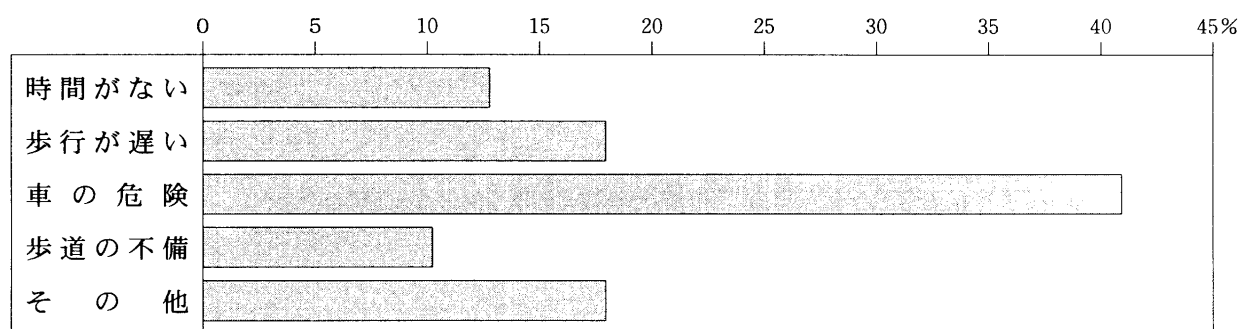


表19 散歩の障害



ラと異なり動作を止め自然な日常生活をとらえてファインダーを見る必要がなく、対象者の日常生活をとらえやすく、また、対象者と対話しながら観察できる。同居または別居している祖父母の生活の断面を、身の回りの環境（小物から家、車、道路、店、近隣の人々まで）の利用の仕方と、その後、不便について観察・記録し

た。その結果、近親者や友人の視点から、問題点を容易に発見・記録することは、結果的に家の体面がバリアとなっている福祉サービスの導入についても、高齢者の生活を支えて、円滑に行なうことが可能となる環境の条件について、社会的側面から問題の深い理解と対策の成熟を、地域のレベルで共有しうる可能性へとつながる

表20 個人行動画像の記録

| 性・年齢 | 家族構成 | 生理背景 | 行動画像 |
|---------|--------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 69 F | 夫73, 長男50, 嫁47, 孫23 F, 21 F | 元気で、家族全員の食事を作る。家中を掃除（嫁は勤務）の畑作り | 炊事, 食事, 清掃 |
| 2. 73 F | 同上 | 無職・卒中後。寝ているか, 散歩 | 食事, 立上り, 歩く |
| 3. 74 F | 15年前, 夫死別, 子供は東京・大阪 | 元小学校教員の婦人会長, 生涯学習団体ほか | ワープロ練習, 生け花, 外出 |
| 4. 70 F | 30年前, 夫死別, 長男 | 田2町, 畑半反。桃作り研究会, トラクター運転 | 農協で振込み, 面接, 軽トラックで帰る |
| 5. 73 F | 夫81, 長男51, 嫁47, 孫F, F, M | 左足が不自由。田1.5町, 畑1.5反, おふくろの店店長, 老人会婦人部 | 農協で確定申告, 農協を出る。運転して帰る |
| 6. 86 F | 夫89, 長男55, 嫁53, 孫35, 嫁35, 曾孫2人 | 新聞配達50年。宅配, 趣味仕事, 畑, お地蔵様の世話。年中素足 | 宅急便の自転車配達 お地蔵様の世話 |
| 7. 65 F | 夫70, 長男50, 嫁49, 孫23 F | 腰がまがっており, 膝が湾曲している。 | ゲートボール 春, 夏, 秋は屋外で練習。 冬でも館内で練習 |
| 8. 90 F | 夫死別, 長男56, 嫁55, 孫34 F | 正座できる | 安祥寺の尼講 |

と考えられる。

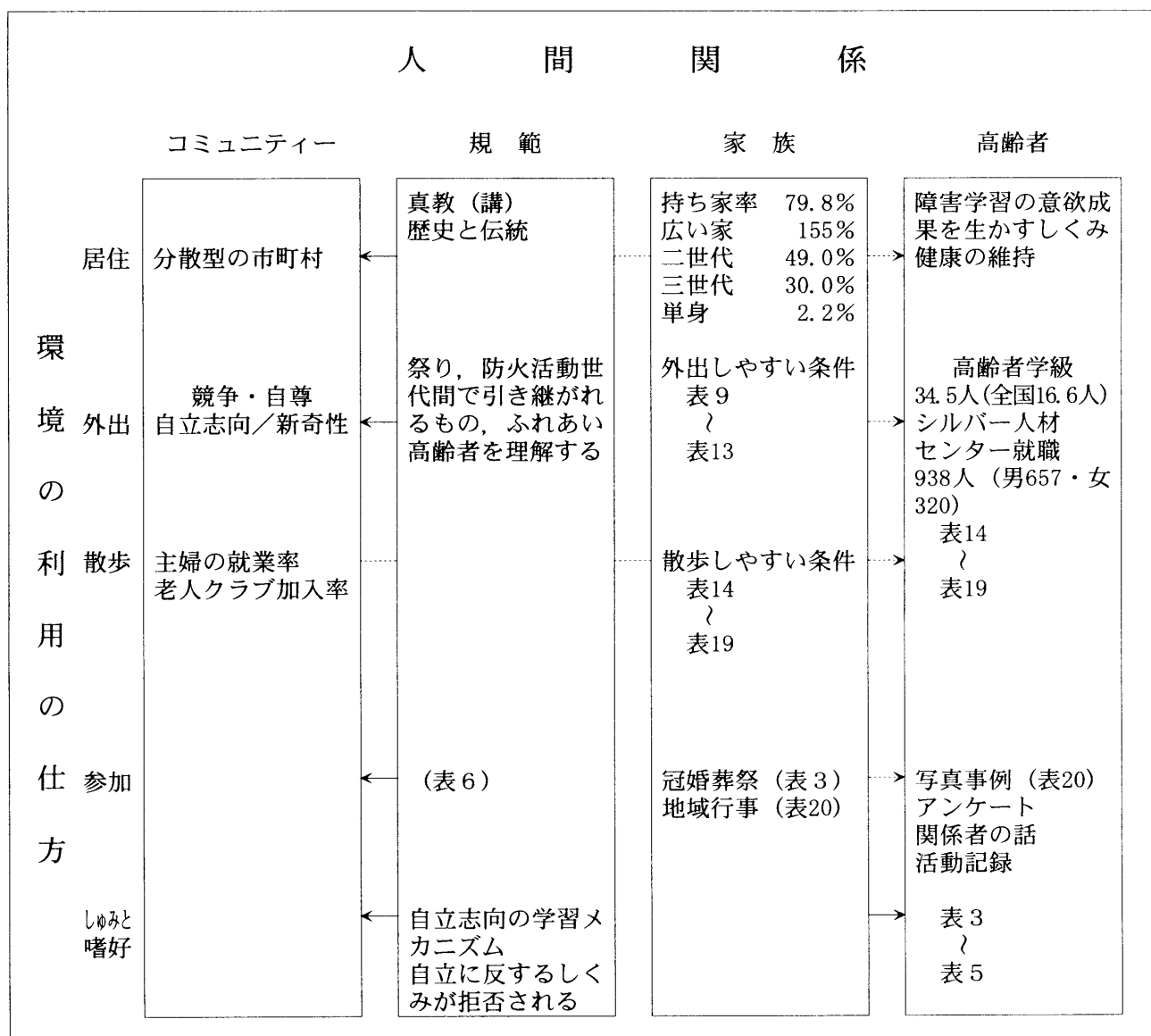
IV おわりに

富山県は比較的均等に分散した市町村の地勢と人口を背景として、高齢者にも競争、自尊、自立志向の特徴が歴史的にもみられる。また主婦の就業率、老人クラブ加入率、持ち家率などの高さが、大半の老人クラブの自治組織として機能するという積極性を生んでいる。

外出と散歩は、家の中ではできない。散歩は弱気で主観的、外出は強気で客観的である。差はあるが、外出と散歩を円滑で満足にする条件として、おおざっぱには共生とされる。ネットワーク、安心、体力、意欲、人間関係、情報、理由とバリアフリー、アクセス、快適、安全などがあるが「集団＝共生」ではない。「集団のなかでの個人のさまざまな有り様」が共生であろう。集団的な行動自体が、加齢や環境変化によって機械的に減少するのではなく、「個人の有り様」を決める伝統的に共有された枠組が消

失していくと、単なる個人の参加はたとえ可能であっても、以上の結果より共生としての意味や満足をもはや得られない。趣味、学習、宗教は、個人の活動とつながる地域集団が存在して、共生の意味をもつようになる。加齢に伴う学習と宗教の交代や趣味の再増加は、個人的というより共生という目的に変化したようにみえる。以上の結果より共生のネットワーク（図2）をこれまでの事実から想定できる。人間関係と環境の特徴とが網の目を作って、その各部分を有効に活動させる。調和的で意志的な人々の努力があると思われる。行政はここでは主体としても計画作りでは作用しないので、歴史的な意味づけをもつコミュニティの自律性によって動いていると思われる。共生は家庭や地域社会のなかで、立場の異なる人々が相互に満足に暮らせることにあり、その方法論を考える基礎的資料となると考えた。富山における特に集団活動、地域活動については住民主体であること、保健・福祉に及んでいない文化的な伝承性が現在も強

図2 共生のネットワーク



いことが特徴であり，今後とも重要な課題として探求していきたいと考えている。

最後に，アンケート調査の実施にあたりご協力いただきました，高岡市ふれあい福祉センター，高岡市役所高齢福祉課，高岡市老人クラブ連合会，高岡市町づくりセンター，戸出ふれあい学級の方々に感謝致します。また実際に調査にたずさわっていただきました高岡市のボランティアの方々，富山短期大学生生活科学科の学生の皆様に心より深謝の意を表します。

付記

・本研究は科学技術庁振興調整費，社会基盤研究，「高齢社会における製品・生活環境のユニバーサル化に関する研究」の一部をもちいた。また健康都市国際学会（2000，2，東京），第59回日本公衆衛生学会総会（2000，10，群馬）において発表した。

文献

- 1) 科学技術庁社会基盤研究開発局成果報告書
2, P51～P65 (2000)

- 2) 健康都市学術会議発表要旨 (WHO健康都市研究センター) 2 (2000), 佐々木昭彦, 金田桜子
- 3) 第59回日本公衆衛生学会総会抄録集 668 P, 金田桜子, 佐々木昭彦
- 4) 富山県統計課 105～144 (2000)
- 5) 高岡市計画市民アンケート調査報告書 33 (2000)
- 6) 富山県勢要覧 175 (2000)
- 7) 高岡市の福祉・保健 46 (1998)